



PREX NOW

No. **126**

July / August
2003

財団法人 太平洋人材交流センター
Pacific Resource Exchange Center

contents

page 1 ● ニュース&レポート

キルギス貿易産業副大臣一行と
大阪商工会議所会員の懇談会を開催

page 2 ● 講師の声 1

日本の母子保健・助産所について学ぶ
ブラジルの産科看護師

毛利助産所 助産婦 毛利 多恵子

page 3 ● 講師の声 2

現代中小企業のベンチャー・イノベーション
神戸商科大学商経学部経営学科 助教授 佐竹 隆幸

page 4 ● 企業訪問

山岡金属工業株式会社を訪問

page 5 ● PREX役員、常任幹事のひとこと

「自らの夢を実現する」ために学ぶことの素晴らしさ
PREX常任幹事 大林 剛郎

page 6 ● PREXだより

事務局ニュース

7・8月実施の研修
コラム



ニュース & レポート

News & Report

キルギス貿易産業副大臣一行と 大阪商工会議所会員の懇談会を開催

[キルギス国別特設研修]

PREXでは5月19日から約3週間、JICAからの委託により、キルギスの貿易産業省より研修員を受け入れ、研修を実施した。トゥメンバエヴァ副大臣及び国際協力・WTO部トマエヴァ部長、CIS・中国経済協力部レッツ部長の計3名で、同国の軽工業開発、輸出振興に関わる政策の改善・強化のため、日本での経験や日本企業の現状を理解することを目的に、経済産業省やJETRO、関西を拠点とする様々な企業を訪問した。

研修の中で、大阪商工会議所において、同会議所貿易部会会員企業とキルギスの貿易産業副大臣ら研修員との懇談会が開催された。

懇談会では、トゥメンバエヴァ副大臣及び両部長より、キルギスの概況や貿易、産業政策の現状について簡単に説明されたのに続いて、現在キルギス貿易産業大臣顧問として現地に赴任中である竹原専門家より、キルギスでのビジネスチャンス(地理的戦略性、マーケットアクセス、インセン

ティブ、キルギス日本インダストリアルパーク構想など)を中心に具体的な説明がなされた。

キルギスの研修員にとって、キルギスをはじめ中央アジア地域が日本では十分に知られていないことが予想外だったようであるが、これを第一歩として、今後も相互の情報交換を十分に行之、日本とキルギスそして関西とキルギスの相互経済交流がより一層活発になることを期待しているようであった。

—国際交流部 課長 森光 恵美子



■キルギス概要

人口：500万人強
面積：199,500km²(日本の半分)
首都：ビシュケク(80万人)
GDP：1,690mil.\$(2002年)
人種：約80人種(53%...キルギス人)
言語：キルギス語(国語)
ロシア語(公用語)
高度：国土の94%が海拔1000m以上
WTO：1998年にCISのトップを切って加盟



三田屋本店にて、食品加工業の
商品開発とサービス産業における
顧客満足について伺った。



メイコー化粧品にて、同社における経営戦略と製品開発について、また海外展開についても伺った。左から国際協力・WTO部トマエヴァ部長、貿易産業省トゥメンバエヴァ副大臣、CIS・中国経済協力部レッツ部長。

「キルギス国別特設研修

(軽工業開発、輸出振興)

実施日時 5/19～6/5

研修参加者 キルギス 3名

(貿易産業省副大臣、部長
クラス)

関係機関 国際協力事業団(JICA)
大阪国際センター

内 容 軽工業開発、輸出振興

お世話になった企業・団体他

(訪問順・敬称略)

東京都築地市場、経済産業省、日本貿易振興会、大創産業、トヨタ自動車、関西経済連合会、深喜毛織、松栄堂、大阪国際見本市委員会、大阪府、大阪繊維リソースセンター、三ツ星貿易、神戸市、神戸港国際流通センター、良品計画、東洋紡、阪急交通社、江崎グリコ、三田屋本店、メイコー化粧品



日本の母子保健・助産所について学ぶブラジルの産科看護師



[助産施設における出産・出生ケア(ブラジル)]

昨今ブラジルでは出産現場における人間性疎外が進み、「安全」の名のもとに不必要な医療介入が膨らみ始め、帝王切開率が世界最高レベル(約40%)となっている。しかし、同時にブラジルでは出産をもう一度人間の手に取り戻そうという「出産のヒューマニゼーション」と呼ばれる動きが生まれている。今回の研修は、PREXにとって初めての医療・保健分野の研修であったが、専門家の方で組織された運営委員会と、助産所の皆様のご協力により、無事研修を終えることができた。

毛利助産所の毛利多恵子氏は、運営委員で全体カリキュラム案の作成者であり、また、助産所での実習においては、実際に研修員を指導頂くなど、今回の研修に対して全面的に支援頂いた。



毛利 多恵子

毛利助産所 助産婦
JICAブラジル国別特設
研修運営委員

この研修は、お産のケアを学ぶ、医療分野の研修です。ブラジルの助産婦たちが日本の助産施設、特に助産所で、「人間的な出産と出生のケア」を学ぶものです。2003年2月から4月まで、11名のブラジル助産婦たちが訪日しました。

ブラジルでは、帝王切開率が高く、医療介入の多い出産が多かったのですが、政策的に大きな変化がありました。医療の中のヒューマニゼーションが謳われ、お産は病気ではなく、病院ではない「助産所」でケアするというプログラムや助産婦養成に力をいれたりするようになりました。つまり安全性とケアの質と医療経済の効率化から、お産のケアへの新しい方向転換が

提案されたとはいえます。出産という人生のできごとには、医学的管理だけでなく、人間的な愛情のケアの重要性が再認識されたのだと思います。今回の研修員は、すでにブラジルの現実の中で「人間的な出産と出生」を実践され、具体的な「実践知」を求めて来日されました。

研修の中身を少し紹介させていただくと、日本語研修、プログラムオリエンテーション、ホームステイなど3週間かけてゆっくりと日本の生活になれていただき(12時間時差)、その後本格的な「助産三昧プログラム」です。日本の母子保健、日本の助産所について講義、さまざまな母子保健施設の見学、助産所研修4週間、最新の助産学トピックス講座2週間、日本助産学会学術集会などへの参加です。妊娠・出産・育児という大切な時期のケア実習を、日本では1%という少数の、しかし女性たちの評価が一番高い助産所で行いました。また、助産所は日本の一般家庭

のような雰囲気なので、日本人の生活、心情、文化を存分に味わっていただけたと思います。

日本とブラジルという文化や医療の現実の違いはあるものの、出産ケアの本質的なものは共有できたと思います。「自然の生理の見事さ」、「人が人を産むこと」、「人が生まれること」、そして何が一番大切なケアなのかをお互いに再確認できました。

帰国後のアクションプランの発表では、実に具体的な実行可能な案が発表されていました。これからのブラジルでの変革が楽しみです。

日本のよき出産の知恵や助産の技は、シンプルな手と温かい母のような配慮といえます。母なるものによって、これから母となる人を支える技なのかもしれません。

今回の研修は、PREXに大変お世話になりました。通常PREXが関わっておられる研修とは違う分野であったとききます。研修企画から研修運営・評価まで、いつも温かくきめ細やかに配慮していただき、何よりいつもと違う種類の研修に好奇心と興味をもっていただき楽しんで運営していただけたことを、感謝申し上げます。来年もさらによい研修となるようご協力よろしくお願い申し上げます。



フェアウェルパーティーにて。
前列左から研修員ジョアナさん、
シウマさん、エリアーニさん、
大阪大学 中村教授。
後列左 瀧澤助産院 瀧澤院長、
後列右 PREX千種主事。



関西ブラジル人コミュニティの協力を
得て、神戸市元町の移住センターにて
市民交流シンポジウムを開催。
一般市民や在日ブラジル人に対して
ブラジルの助産の現状や研修成果などを
紹介。ブラジル料理もふるまわれた。

「助産施設における出産・出生ケア(ブラジル)」

実施日時 2/21 ~ 4/24

研修参加者 ブラジルで出産・出生の実務に携わる産科看護師及び行政機関、
病院、大学等研究機関、NGOに勤務し、出産・出生に携わる者 11名

関係機関 国際協力事業団(JICA)大阪国際センター

内 容 助産学、助産所での実習、施設見学、学会・シンポジウムへの参加、
アクションプラン作成など

お世話になった企業・団体他(訪問順・敬称略)

大阪大学 大学院 人間科学研究科 教授 中村安秀氏、医療法人医徳会 真壁病院
院長 羽根田潔氏、国立保健医療科学院 疫学部 応用疫学室長 三砂ちづる氏、元
JICA専門家 藤原美幸氏、毛利助産所、大谷助産院、あゆみ助産院、瀧澤助産院、
大阪市立大学医学部附属病院、大阪市東住吉保健センター矢田出張所、大阪府
立母子保健総合医療センター、女性ライフサイクル研究所、みずい助産院、助産院
ていだ、聖路加看護大学 教授 堀内成子氏、講師 有森直子氏、片桐麻州美氏、葛
飾赤十字産院 院長 進 純郎氏、日本家族計画協会、沖縄県立看護大学 母性看護
学 教授 加藤尚美氏、助教授 園生陽子氏、大阪大学大学院 エレーラ ルルデス
氏、木屋信明氏、関西ブラジル人コミュニティ



現代中小企業のベンチャー・イノベーション

[中南米地域・中小企業政策セミナー]

PREXは、中南米諸国で中小企業振興政策の立案などを担当する政府職員を対象にセミナーを実施した。多くの中南米諸国では、近年の貿易自由化政策でアジア地域からの製品輸入が急増し、既存の中小製造業が衰退するなど経済の停滞が続いている。このような状況下、これら国々の中小企業振興に寄与すべく、今回このセミナーが初めて実施された。セミナーでは、中小企業経営や中小企業政策などの専門家である神戸商科大学佐竹隆幸助教授をメインの講師として迎え、講義や参加者との意見交換を通じて指導頂いた。



佐竹 隆幸

神戸商科大学
商経学部経営学科
助教授

現代日本の中小企業は、大きな転換期を迎えている。こうしたなかで、構造改革が不可欠とされる現代日本経済において、新しい経営環境・経営組織・技術革新をもたらす中小企業の役割が重要になっている。現代中小企業の行動原理・企業システム・企業間関係などにおいて、革新的なベンチャー・イノベーションが求められているのである。

企業が創業・成長・廃業する一連のライフサイクルを同一業種で同一主力商品ということで描くと、高度経済成長期は50年、80年代は30年に、現在は4年半くらいであると推定される。この短縮化傾向にある企業のライフサイクルを念頭におくと、現代中小企業が存立維持していく上でこれまでとは違った経営のあり方、すなわち経営革新に基づいた「第二創業」が重要になってくる。ここでいう第二創業による経営革新こそ中小企業によるベンチャー的戦略行動にほかならない。ベンチャー的戦略行動をとる企業形態として、起業型の「独

立型ベンチャー」や大企業などによる「社内ベンチャー」も考えられるが、中でも経済的合理性と公共の利益をと共に享受し、日本における文化的・社会的状況を踏まえて優先的に検討すべきは、既存中小企業の経営革新による第二創業であろう。

既存中小企業の第二創業による経営革新を行うには、中小企業における経営資源上の制約を考慮し、そうした経営資源の不足を補う企業間ネットワークの構築が不可欠である。そこで組織される企業間ネットワークの1形態としては、異業種交流のように全く異なる事業分野の企業による「異」業種企業間ネットワークではなく、事業領域における産業連関係が構築可能な技術的有機的連関係を軸とする、協働体意識を前提とした事業の推進と自企業の存立維持といった目標を共有できる中小企業が結集した「亜」業種企業間ネットワークが望ましい。この亜業種企業間ネットワークの形成が、中小企業の第二創業による経営革新実現のために重要となるであろう。

現代中小企業存立の視点からも、既存中小企業が保有する経営資源を活用しながら、中小企業間における亜業種交流

講義を受ける中南米諸国の
中小企業振興に携わる政府職員たち。



の構築や第二創業による経営革新を進め、産業振興・産業構造転換を実現していくための中小企業の支援・振興策が有効であろう。「中南米地域・中小企業政策セミナー」を通して、未だ多くの国や地域において、中小企業・中小企業型産業に対する支援策の欠如や商工活動に関する法律の未整備という現状が如実に覗えた。こうした地域においても、地域密着型の既存中小企業を地域経済活性化の担い手である存立維持可能な経済主体として位置づけ、既存中小企業振興のための政策的な取組が発展途上国においては重要な課題となるであろう。したがって、このようなセミナーが将来に渡り継続的に開かれ、各地域の中小企業に対する政策的課題を提示していくことで、既存中小企業の存立の施策が今後より推進されていくことを期待したい。



「中南米地域・中小企業政策セミナー」

実施日時 3/10 ~ 20

研修参加者 中南米12カ国13名

(ボリビア、チリ、コロンビア、コスタリカ、ドミニカ共和国、グアテマラ、ニカラグア、パナマ、パラグアイ、ペルー、ホンジュラス、エル・サルバドルのみ2名)の中小企業の振興に携わる政府職員

関係機関 国際協力事業団(JICA)大阪国際センター

内 容 中小企業の役割と日本の中小企業振興政策

お世話になった企業・団体他(訪問順・敬称略)

中小企業総合事業団国際化支援アドバイザー 庵原専三氏、商工中金、ソフト産業プラザ iMedio、プラスクラブ、コムアブリックス、経済産業省中小企業庁、東葛飾テクノプラザ、経済産業省関東経済産業局、全国信用保証協会連合会、奈良県中小企業振興公社、オリエンタル鍍金、大阪商工会議所、山内製粉、アドック神戸



山岡金属工業株式会社を訪問

[ラオス・ベトナム日本センター「ビジネスコース」受入研修]

日本人材協力センター(通称、日本センター)は、かつて計画経済体制だったアジアの国々において、これからの市場経済化のために必要な人材を継続的に育成するため、及び日本との社会や文化について相互に理解を深めるための拠点として、国際協力事業団(JICA)によってベトナム、ラオス及び中央アジアの国々に開設されている。

PREXは、JICAからの委託を受け、日本センター(ベトナム及びラオス)で実施された「ビジネスコース」を受講した成績優秀者を対象に当研修を実施した。日本での企業経営最新事情に関する講話、企業経営の現場視察、日本の企業経営者との意見交換などを通じて、日本センターで習得した机上の知識をより実践的なものとするのが目的である。

様々な企業・団体にご協力いただいた中で、山岡金属工業株式会社では独特の企業文化と自由に仕事を楽しむ社内風土がどのように生まれたのか、同社の経営理念を講義いただいた。



家庭用ガスタコ焼きメーカー
山岡金属工業を訪問。



山岡俊夫

山岡金属工業
株式会社
代表取締役

山岡金属工業の創業は昭和31年、今から48年前の正月であった。それから今日に至るまで、家庭用ガスタコ焼きの自社商品造りから始まり、現在では240種の商品を製造販売する企業となった。

私は、企業発展のためには、「世の中から認められる企業にならなくてはならない」と考えJIS、ISO9001、ISO14001取得、そして優良申告法人は昭和50年から現在まで28年間表彰されています。

私は、企業は大きくするより安定した企業づくりに努力するべきであり、山岡金属がここにあることによって地域社会、日本、世界の人々に喜んでいただける企業として平成17年までに、全館、企業ミュージアム化を目指しています。

すでに2002年度版大阪21世紀協会発

行の「大阪の博物館・美術館」には“夢とロマン溢れる見て触れて楽しく学べるものづくりミュージアム 山岡金属の 技術文化館、技術開発館...”と大阪歴史博物館と背を並べて紹介されています。

あと2年後、山岡金属は、組立工作館、機械工作館、そして 昭和の思い出館を総じて“タコ焼きミュージアム”として完成させ、1.利益の追求、2.文化と芸術の追求、3.思想の追求を楽しみながら企業活動を続けるつもりです。

すでに山岡金属への見学者は、各種団体、小学生を含む学校関係、外国研修生を含めて3,000名が来館されている。見学される外国研修生は、各国の代表としての自覚から皆真剣である。私は研修生に話しをした。

「日本の企業はあまりにも利益の追求をするあまり、日本古来からの数多くのすばらしい文化、芸術、思想が置き忘れてきたと思います。皆様も貴国を経済大国にしようと努力されているでしょうが、貴国にもすばらしい文化、芸術、思想があると思

います。これらを忘れて経済大国を目指した場合、良い国にはならないと思います。やはり経済、文化、芸術、思想などバランスを取りながら発展させなければ楽しくて美しい国はできないと思います。どうか、このことを忘れず貴国の発展のために努力してください」

外国研修生の代表は「こんなすばらしいお話をしていただき感動いたしました。彼等は手を振りながらバスの人となった。

日本人は経済大国といわれるより文化大国として世界から尊敬される国民にならなくてはならないと思います。日本の女性がなぜフランスやヨーロッパに憧れていくのか?それは、グッチ、エルメス、ヴィトンのハンドバックだけを求めていくだけではなく、それは文化と芸術の香りを求めて旅行するのであると思います。

日本にも外国から、文化・芸術の香を求めて多くの人々が来るように我々は努力しなければならないと思います。



梶原工業の梶原代表取締役社長より
経営戦略についての講義を受ける研修員。

ラオス・ベトナム日本センター「ビジネスコース」受入研修

実施日時 4/1~16

研修参加者 現地日本センターで実施された各種ビジネスコースの成績優秀者、日本センタースタッフ
ラオス2名、ベトナム11名 合計13名

関係機関 国際協力事業団(JICA)大阪国際センター

内容 経営理念、経営戦略、研究開発戦略、CS向上戦略、企業の発展の歴史、人材育成、生産性向上活動、ホテルのサービス戦略、海外市場開拓(米国・日本)など

お世話になった企業・団体他(訪問順・敬称略)

大阪市立大学経済研究所 植田助教授、ナベル、サントリー、松下電器産業、アクシスマテリア、加古工業所、キャノン、東京証券取引所、梶原工業、吉田オリジナル、大野旅行ジャーナリスト、ザ・リッツ・カールトン大阪、国際社会貢献センター、大阪国際経済振興センター、大阪企業家ミュージアム



「自らの夢を実現する」ために 学ぶことの素晴らしさ

PREX常任幹事 大林 剛郎
株式会社 大林組 会長

「人材育成」や「国際交流」をテーマに、アジア・太平洋地域の開発途上国と当社のかかわりを考えると、タイの現地法人スタッフを対象とした技術研修がまず頭に浮かぶ。

タイは、当社が昭和39(1964)年4月に戦後初めての海外拠点を築いた場所だ。昭和49(1974)年には、現地資本との合併でタイ大林を設立。現在同社は、日系企業はもちろん、現地の民間企業や官庁からも工事を受注し、順調に業績を伸ばしている。

当社は、昭和47(1972)年からこれまでの約30年間に、合計61名の現地スタッフを日本に受け入れ、技術研修を行っている。年齢は20代後半から30代前半が中心で、職種も建築だけでなく土木や設備におよぶ。研修期間は原則2年間。カリキュラムは、本人のスキルに応じてきめ細かく設定し、専門性をより深めてもらうとともに、日本語や日本の慣習について知見を広げてもらうことに重点を置いている。現在も、5名の研修生が技術の習得に日々奮闘している。

研修は、本社技術部門での数ヶ月間にわたる導入教育を経て、実際の工事現場での実地教育が中心となる。当社中堅職員の指導のもと、最先端の建設技術を体験し、学んでもらう。指導役の当社職員は、技術の習得だけでなく、メンタル面でのケアにも配慮している。その後、他の現場で違う施工技術を学んでもらうこともあれば、設計や見積といった部門で知識を広げてもらうケースもある。最後に、研修全般をレポートにまとめて、帰国の途につく。

帰国後の彼らは、現地法人の中核を担うエンジニアや現場技術者として、大きな役割を果たしている。約30年にわたる研修で、研修生は555人の現地スタッフのなかで9%を占めるまでになった。現在この研修制度は、タイだけでなく、インドネシア、ベトナム、シンガポール、ミャンマーにまで対象を広げている。

言葉はもちろん、生活習慣や文化の異なる環境での2年間は、苦勞も多い。しかし、毎日が驚きの連続で、「貴重な体験ができた」「故郷に帰って仕事に活かしたい」と大半の研修生が口を揃える。そして、自国の発展に想いを馳せ、自らの夢を熱く語る研修生たちの真剣な眼差しに、私自身も大いに勇気づけられる。

生産施設を持たないわれわれ建設業にとって、「人」が最大の財産である。業界を取り巻く環境がますます厳しくなるなかで、私は自社の社員に対して「自分の理想を実現するためには、どういう能力を身につけなければいけないか、よく考えて欲しい。そうすれば、努力する方向が見えてくるはずだ」と話している。

われわれは、開発途上国の現地スタッフに対して、学ぶ機会と場所を提供し続けてきたにすぎない。そのチャンスを活かし、自らの夢の実現に必要な技術や知識を身につけ、自国での仕事に反映させているのは、まぎれもなく彼ら自身だ。

開発途上国での人材育成、国際交流の分野で、われわれが担うべき役割はますます大きくなる。そして、われわれが彼らから学ぶべきところも多い、と感じている。

事務局
ニュース

JICA月刊誌「FRONTIER」でJICAのパートナーとしてPREX紹介
国際協力事業団(JICA)の月刊誌「FRONTIER(フロンティア)」6月号でJICA事業のパートナーとしてPREXが紹介された。この中でPREXは「アジアの人材育成に注ぐ関西パワー」というテーマで、「官」による主導ではなく、関西財界人たちが自ら音頭を取り、関西の企業が寄附した基金で運営されているユニークな組織として掲載された。

常任幹事会を開催

6月5日、piaNPO会議室においてPREX常任幹事会を開催した。座長津田和明サントリー株式会社相談役からの挨拶、事務局による報告に続き、常任幹事の皆様からPREXの事業、ビジョンに対する貴重なご意見とご助言をいただいた。

7・8月実施の研修

■「メキシコ中小企業振興政策セミナー」を実施

期 間 6/30～7/25
参加者 メキシコの中小企業の振興に関する業務に従事している政府職員 8名
内 容 中小企業振興

■「日系研修員受入研修」(ドミニカ共和国)を実施

期 間 7/8～3/25
参加者 ドミニカ共和国で電気装置部品の生産に携わる職員 1名
内 容 日本の製造業における生産管理、品質管理の取り組みについて、工場実習を通じて学ぶ。

■「インドネシア海外研修」を実施

期 間 8/25～29
参加者 インドネシアで輸出に関わる企業・経済団体の輸出促進担当者 50名
内 容 国際貿易に関するビジネスシミュレーション
開催場所 ジャカルタ

■「救急・大災害医療セミナー」を実施

期 間 8/27～9/17
参加者 各国で救急・大災害医療に携わる医者、行政官 8名
内 容 日本の救急医療体制の整備過程について現状を紹介。

C O L U M N

「助産施設における出産・出生ケア」研修を担当して

国際交流部 主事 千種 成俊

本研修はいままでにPREXで実施した研修と全くカラーの異なるもので、講義の時間を控えめにして、実習に重点を置いたプログラムを数多く設けた。4週間かけて実施した助産所実習はもちろんのこと、助産所以外の訪問先でも器材を用いた演習が多く、実際に器材を手にして講師の指導を受けるのは、帰国後に現場の第一線で活躍する研修員にとって、成果アップにとっても有効な手段である、ということに改めて感じさせられた。

今回の研修で協力いただいた瀧澤助産院に私が伺った際に生後4日経った赤ちゃんを助産婦さんが沐浴してあげている場に立ち会えた。およそ20分、お母さんや研修員たちに見守られるなか、「瀧澤温泉」で汗を流した赤ちゃんはとても気持ちよかったのか、終始ゴキゲンで満面の笑みを見せていた。私は赤ちゃんの表情ばかりに気をとられていたが、研修員は沐浴の際に注意する点などのアドバイスも受け、実際に助産婦さんの手助けを行っていた。私も温泉好きで自宅近隣の浴場を頻りに巡っているが、30?年前の初沐浴時の気持ちよさが身体に染みついていて、と考えさせられた。

3カ月間の長い研修で、研修員の要望も取り入れることで一部スケジュールを変更する等、研修実施期間中は何かと大変であったが他の研修では味わえない良い経験をさせていただいた。2004年2月(予定)に開始する第2回目の実施に向けて、さらに様々な演習ができるよう準備を進めていきたい。



瀧澤助産院にて
赤ちゃんの沐浴の
実習を受ける研修員。



「助産に役立つ
東洋医学の利用に
ついて」のテーマで、
あゆみ助産院
左古院長より講義を
受ける研修員。
左古院長は
奥左端から2人目。

PREXの
研修実績

2003年
6月末現在

PREXは、1990年4月
設立以降、開発途上国の
人材育成事業と、
その活動を通しての
国際的人材交流促進に
努めています。

● 研修累計(1990～)

205コース

● 受講者累計(1990～)

94カ国・地域 6,855名

【受入(訪日)研修 2,184名 /
海外研修 4,671名】

● 2002年度

26コース 464名

【受入研修 23件 / 海外研修 2件 / 同窓会フォローアップ事業 1件】

● 2003年度(予定)

28コース 589名

【受入研修 24件 / 海外研修 2件 / 同窓会フォローアップ事業 2件】

編集・発行

財団法人 太平洋人材交流センター
専務理事 三田 昌孝

〒552-0021 大阪市港区築港2丁目8-24
pia NPO 5階 502号室

TEL 06-4395-2650
FAX 06-4395-2640

ホームページ: <http://www.prex-hrd.or.jp>
電子メールアドレス: prex@prex-hrd.or.jp